

# 探究のお悩み Q & A

各学校の先生方が考案され、実践されている取組や方針をご紹介します。

御校で探究に取り組まれる際のヒントとしてご覧いただければと思います。

## テーマ 学校外連携

### Q

## 学校外とのネットワークづくり、難しい…

### A.

## セミナー等に参加し、新たな連携先を開拓しています。

加古川東高校（兵庫・県立） 教育企画部 SSH主任：理科科長 新友一郎先生、同 STEAM担当：谷口正明先生

### 理

数科の課題研究、普通科の探究に加え、2020年度から夏休みに希望選択制・学科学年不問の「STEAM特別講座」をスタートさせました。「ワクワクする好奇心から新しい知を創出する」をキャッチフレーズに、行政、企業、大学・学校、卒業生らと連携し、現在は20あまりの多彩な講座\*を設けています。

外部連携が進むきっかけになったのは、初年度のSTEAM特別講座の一つ「加古川市の地域デザインを考える」でした。生徒たちがどんどん主体的に動き出し、加古川市長らの前でプレゼンをするほどに活動が盛り上がったんです。それをきっかけに、行政や民間企業とのつながりができ、そこからのご紹介などで連携先が芽づる式に増えていきました。特に中国銀行は、本校のニーズに合わせて自社の取引先をつないでくださるなど、ハブ的な存在となっています。また、新たな連携先を開拓すべく、担当教員が学会やセミナーなどに積極的に足を運んでいます。登壇者や参加者らとそこで名刺を交換し、後日、メールで教育活動への協力を依頼すると、多くの場合は快く引き受けてもらえます。

外部との連携の際に心がけているのが、本校としての目

標ややりたいことを伝えて理解してもらうこと、そして、最初はスポット的に依頼してうまくいきそうかを試すことです。連携してどうしたいのかが曖昧、相手に丸投げ…ではうまくいきませんし、相性もあります。事前に打ち合わせを重ねて、こちらの希望と相手ができることをすり合わせ、生徒にしっかりと伝わる方法を教員が考えることも大事だと感じています。

大人の話の聞いたり大人と議論したりすることで、生徒の世界は大きく広がり、社会性や主体性が育まれることを肌で感じています。教員にとっても外部との協働は刺激的で得るものも多くありますし、何よりも楽しいんですよね。課題は、外部連携を持続可能な取組にすること。そのために、CSR（企業の社会的責任）や広報的な部分で連携先にとってもメリットがあるWin-Winの関係構築と、担当教員に異動があっても取組が引き継がれるような内部共有を心がけています。

\*2023年度のSTEAM特別講座と連携先の一例：「画像認識で世の中はこう変わる!～画像認識研究の最前線～/兵庫県立大学」「日本語学校で海外留学生と交流しよう/KIJ語学院」「Premiere Proで動画作成!/神戸大学学生(卒業生)」「データベースで政策提言しよう(地域デザイン)/加古川市」「かがくえぼんを創ろう/アトリエPetata」「起業家ワークショップ～稼ぐ力が身に付く起業～/(株)ROX」「電子工作×micro:bit/京都大学学生(卒業生)」「動物骨の構造を見てみよう!!/九州大学学生(卒業生)」

## 探究活動の全体の流れ

第I期(2006年度～)から継続してSSHに指定され、今年度、第IV期3年目を迎える。第IV期は、「新しいことに挑戦して探究するための資質・能力を、“全ての教育活動”で育成

する」を目標に掲げ、探究を軸に、全教科の通常授業でベーシックスキル(発表、課題発見、データ分析、思考力等)を育成することに取り組んでいる。STEAM特別講座からスター

トした外部との連携は、理数科の課題研究や普通科の探究のシーンまで広がり、2024年度は16の企業や自治体、大学・学校などと連携している。

## A. 地域協議会が大きな力となって、地域で生徒を育てています。

串本古座高校（和歌山・県立） 未来創造委員会委員長：高須 崇先生

2

2016年度に「串本古座高校魅力化プロジェクト」として学校改革をスタート。「学校内や教員だけでは育てきれない部分がある」「地域の生産人口が減少し、地場産業が衰退している」という課題感から、自然、文化・歴史、地場産業、地域人材といった地域の資源を活用し、生徒が地域で学ぶ、そして、ゆくゆくは地域に貢献できる人材に育つ…という「地域まるごとキャンパス構想」を立ち上げました。並行して、本校の校長が串本町と古座川町の町長にはたらきかけ、魅力ある学校づくりのために三者が連携・協力することが約束され、「串本古座高校地域協議会」が設置されました。この地域協議会の存在が、外部連携の要となっていきました。

具体的には、地域協議会が商工会、行政、地域の事業者・住民などに対して高校の教育活動への支援や協力を依頼し、地域まるごとキャンパス構想に基づく学校設定科目（紀伊半島探究、南紀食文化探究、ジオパーク学、水産生物探究、マリンスポーツなど）の特別非常勤講師を務めてい

ただきました。例えば、地元のダイビング協会の方に協力していただき、学校のプールで実習をしたうえで実際に海に潜ってライセンスをとる…ということもやりました。力を貸してくださった方の人数は、2018年度にはのべ300人近くに上り、こうした外部とのつながりは本校で取り組んでいる探究活動にも引き継がれていきました。

地域と学校をつなぐうえで重要な役割を果たしているのが、地域協議会から派遣され校内に常駐する地域支援コーディネーターです。科目ごとに、学年主任や管理職、教務らも参加する担当者会議を毎月開催し、教職員とコーディネーターと一緒に授業をつくっています。コーディネーターは、育てたい生徒像や身につけてほしい力、教員・生徒や科目のニーズを深く理解し、それに応じた地域人材とつないでくれます。実際に地域の方に協力をお願いすると、地域の未来を担う高校生のためならと、ひと手間かけることを厭わない方がほとんど。力を貸したいと思っている人、見守ってくれる人は、実は地域にたくさんいる。こちらからアプローチして思いを伝えることが大事なんだと実感しています。

これまでの探究活動では、生徒の興味・関心に応じて、それに見合った方をコーディネーターが紹介してくれるケースが中心でした。今後は、生徒が自らアポイントメントをとって出向くつながり方を強化したいと考えています。地域で育ててきた子どもたちなので、こちらが思っている以上に、地域の人を知っていたり、つながりがあったりするんです。生徒は失敗もするでしょうが、失敗からこそ学んでほしいし、失敗を恐れずに動きながらブラッシュアップしてほしいと思っています。生徒が思い切って踏み出せるためには、生徒の無礼や失敗も含めて包み込んでくれる地域、一緒に生徒を育てようとしてくれるのが地域協議会であり、本地域ではそこがうまく機能しているのだと感じています。



ラムサール条約に登録された世界最北の大サンゴ群生域にて、ダイビングを体験する生徒たち（学校設定科目「マリンスポーツ」）。



南紀熊野ジオパークで行われた、特別非常勤講師によるフィールドワークの様子（学校設定科目「ジオパーク学」）。

### 探究活動の全体の流れ

串本古座高校魅力化プロジェクトの始動以来、「グローバルコース」を中心に地域と連携した探究的な教育活動を実践。探究のコンセプトは「夢を語る18歳の育成」。地域をまるごと学びのフィールドとし、3年間を通し

て段階的に自分の未来を切り拓いていく。1年次には、自分のあり方や生き方を深めながら「自分の夢」について考え、2年次は「地域の素材を活かして新たな価値を創造せよ」、3年次は「自らの探究的な学びを地域に選

元せよ」というミッションのもとそれぞれのプロジェクトに取り組む。2024年度に普通科を「未来創造学科」に改編し、全国初の「宇宙探究コース」のほか「文理探究コース」「地域探究コース」を設置した。



## 探究にかけられる予算や人材、どうしてる？

### A. 培ってきた財産を眠らせず より活かそうとしています。

新潟南高校（新潟・県立）  
校長：横堀真弓先生

昨

年度の探究で重視したのが「持続可能性」です。本校は2003年のSSH校指定以来、探究的な学びを進めてきましたが、第V期SSHの採択は叶わず、2年間の経過措置となり、予算が減少。それでも、探究の継続・発展を目指しているからです。まず先生方が「お金をかける前に眠っている資料や道具を活かす」取組を始めてくれました。各所でバラバラに管理されていた資料や道具等を理科室倉庫に集約、全員で把握して有効活用できるようにしたのです。

本校では探究の一環で海外研修——台湾の高校との共同研究も行っており、現地視察や帯同にもお金がかかります。その費用の一部は、PTAに後援会費をお願いし充当しました。加えて、相手校と関係性ができたからこそ、オンラインの交流や、台湾の生徒の訪日の歓待など、限られた予算のなかでもできる活動を広げています。

また、先生方がSSHの蓄積を基に「教科授業でも探究場面を作る」ことに努めています。探究担当を短いサイクルで回せるよう、業務を可視化する、ネット上のnoteに活動を記録するなど、教員が入れ替わっても続く体制も志向。特別な予算や人に頼らなくても、探究は持続でき、その学びが生徒の自主性を育てていく。そうしたモデルを確立し、SSH校以外にも輪を広げることが、先駆けて探究に取り組んだ本校の使命だと思っています。

#### 探究活動の全体の流れ

データ活用をもとに、1学年で社会課題解決を目指す探究を行い、理数コースの生徒は学校設定科目で課題研究にも挑戦。2～3学年で生徒全員が課題研究を行う。新潟市や県内大学、地元企業とも連携。協働する企業に資金面の後援もお願いできないか相談するなど、持続可能な探究にするための手立てを多方面から模索している。

### A. やりたいことを各方面に発信、 助力を得てきました。

坂下高校（岐阜・県立）  
校長：田並千穂先生

咲

明日（さかした）高校マルシェという、地域の企業・団体・クリエイターと生徒が協働するマルシェ（市場）を、2022年度から校内で開催しています。文化祭とは別に、地域の皆様の飲食や物販の出展から生徒の探究実践まで行う催しです。探究の予算を教職員で共有し、補えない資金の捻出を検討。警備スタッフや広報用ポスターの費用は同窓会に協力を仰ぎ、生徒の菓子販売等の材料費は学校徴収金の積立から一度出し、売上を戻してやりくりしました。地域の皆様には、マルシェの商いを各自の裁量にお任せすることで、謝礼等はお支払いせずご協力いただいています。

若手の教員たちが発案し、その熱量に皆が巻き込まれた取組。前校長と、当時教頭の私はその経緯がすごく嬉しくて。本当にできるか懸念もありましたが、覚悟を決め、学校事務の方に規定にふれる面がないか県との調整もお願いして進めました。生徒たちが教育委員会や地域に向いて直接協力を仰ぐことで、多様な方々に応援団になっていただきマルシェの成功につながりました。

探究全体では、互いの目的のために取組によっては無償で協働できる方との連携も、人づてをたどって広がります。まちの課題を共に考えてくださる市役所、高大連携協定を結んだ大学、地域貢献への情熱から生徒と協働で商品開発をしてくださる企業の方などです。

#### 探究活動の全体の流れ

1年次に地域の人々へのインタビューや、地元で販売する商品開発に挑戦。2～3年次は観光・食・保育など興味ごとに縦割りグループでゼミ活動。秋には体育館とその外周で「咲明日高校マルシェ」を行う。「教育助成事業」にも目を向けていて、同校はマルシェの取組を論文にして日教弘教育賞に応募、最優秀賞を獲得し、資金助成も得た。

テーマ 学校内連携



## 教員間で意識や知識の差が大きくて…

### A. 「面白さ」を共有しながら 引き継ぎ・分担しています。

馬頭高校（栃木・県立）  
那珂川学担当：小高圭美先生

那

珂川学という、本校のある那珂川町を舞台とする探究学習を始めたのは9年前。協力してくださる地域の人を探してはつながり、形にしました。その過程で、町には生徒の学びの資源がたくさんあると実感し、ぜひ続けたいと思うように。ただ、その計画と実行はやはり大変で、この先も関わる教員が毎年ゼロから始めるなら、負担が重すぎると感じました。だから、教員間の引き継ぎを意識するようになったのです。

立ち上げた地域連携の取組については「どういう取組で」「地域の誰に相談すればよいか」がわかる一覧を作り続けています。地域関係者との打ち合わせには、ほかの先生にも同席してもらっています。私が魅了された町のヒト・モノ・コトを「こういうの知っています？」と先生方に発信もしています。ほかの先生にもこの町を「面白い」とまずは感じてもらい、ご自身から関わりを深めていただけるように。探究の取組は「義務感でやる」ことになると、途端に辛くなりますから。

私の異動後も全体を把握している人がいるように、連携する町役場の方と交渉し、町として地域コーディネーターも雇っていただきました。探究学習の発表を、町との合同開催にできないか相談し、来賓との連絡調整や会場準備でお力添えいただくなど、業務の分担も目指しています。

#### 探究活動の全体の流れ

1年次に生徒が地域に出てヒト・モノ・コトにふれる。2年次にその体験も踏まえ、取り組みたい地域課題を設定、現地調査を行う。同校は卒業後に地元で就職する生徒が多いが、探究によって就職先のほかにも地域との関わりをもてる卒業生が増え、「社会に参画する土壌が豊かになった」と小高先生は感じているという。

### A. 方向性や困りごとを 研修等で共有しています。

熊本北高校（熊本・県立）  
SSH研究部 部長：前田敏和先生、副部長：川口祐樹先生

課

題研究による探究の推進に当たり、ワークショップ型の職員研修をくり返してきました。「目指す生徒像」「評価のあり方」「生徒への問いかけや関わり方」等を教員同士で話し合い、意識の共有を図っています。講義型の研修でやり方を伝授するというより、皆でアイデアを共有していく形の研修をすると、意見交換のなかにも個々の教員の強みが発揮され、主体的に探究に関わることができるように思います。現在も研修や担当者会議では双方向性を重視。「困り感の共有」「各教員のもつ暗黙知の可視化」「目指す生徒像の確認や更新」等を進めています（前田敏和先生）。

SSH研究部副部長として、どうすれば皆が意見を出しやすい場にできるか模索しています。「こうしてください」とただ伝えるトップダウンになって、いたづらに軋轢を生むようなことは避けたいもの。生徒に仲間と協働の探究を求める以上、僕ら教員も「生徒のどんな力をどう伸ばすか」を、皆で楽しく探究することを目指したいと思っています（川口祐樹先生）。

研修手法をまとめた冊子も作成。目次は小誌サイトから、全体は同校HPからダウンロードできる（要アンケート回答）。



#### 探究活動の全体の流れ

1年次に、生徒の興味・関心や自己の在り方・生き方をふまえてテーマを設定。特にテーマ設定には力を入れ、GoogleドキュメントやMiroなどの支援ツールで生徒の共創を促進している。課題研究を支援する会議を設定し、進捗、困りごとを共有し改善につなげて生徒を支援している（小誌447号の連載「教科でキャリア教育」に関連情報あり）。



## 評価のつけ方、ずっと模索しています…

### A. 交換日記形式を用いて、生徒を日常的にも評価しています。

堀川高校（京都・市立） 研究部部长：濱田 悟先生

本

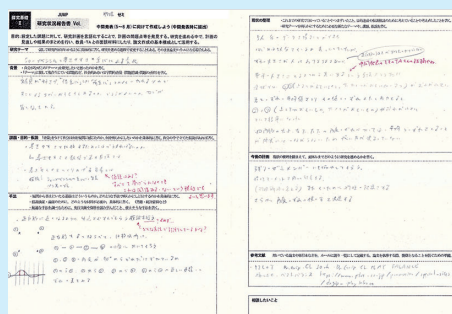
校で大事にしているのが、日頃の評価、いわゆるフィードバックです。教員による「評価」の本来の目的は、生徒自身が自分のできているところ・足りていないところを自覚し、目標や課題を見だし、次につなげることだと考えています。単に点数や段階を示されるだけでは、生徒は自分の現状は把握できたとしても、次にどうしたらいいかはわかりにくいですね。ですから、成績表に載せるためにつけるもの、成果物や取り組む姿勢を総合的に見てつけるものという結果的な評価よりも、毎回の授業のなかや日々の生徒とのやりとりのなかで伝える段階的な評価のほうが本質的だと考えています。

日常的な評価を行ううえでは、生徒一人ひとりと向き合い、「(探究を通して)この生徒はどうしたいのか、どうなりたいたのか」「なぜ、この生徒は今ここで困っているのか」といったことを汲み取ることに重きを置いています。本校の探究は少人数のゼミ形式のため、授業内で生徒と面談する機会が多く、そこで進捗や困りごとを確認し、フィードバックをしています。また、「探究ノート」という生徒と教員の交換日記のようなものがあり、生徒は毎時間、授業での気づきや課題、次に何をすべきか、どこで行き詰まっているかななどを記入し、それに対して教員がコメントを返しています。ルーブリック上ではさまざまな観点で評価基準を設けていますし、探究を通して身につけてほしいことは生徒とも共有していますが、探究において最も重

要なのは「その生徒がどうしたいのか・どうなりたいたのか」です。これは、生徒自身に聞かないとわかりません。生徒と教員がそこを共有できれば、評価の観点や基準が見えてきます。言い換えると、現状どのような課題があるか、今後に向けてどのような目標が設定できるか、次に何をしたらいいか…といったことについて、一緒に考えたり提案ができたりするのです。

昨年度の本校の教育研究大会は、「目標・課題点を生徒と共有する評価 ～生徒が主体的に学習するために～」というテーマで行いました。生徒は、自分に足りていないもの(課題)や目標がわかったときに、モチベーションが上がり、主体的に学習に取り組めるようになるのではないかと。そのためには、生徒と教員が目標・課題点を共有するような評価のあり方が重要なのではないかと。そうした考えの下、本校では試行錯誤を続けています。

生徒の研究状況報告書の一例。生徒の書き込みに対して、「仮説はある?」「どんな方法で計測しているかな?」「中間発表のときのTAさんの指摘やね」など、教員が細かく突っ込みを入れている。



### 探究活動の全体の流れ

科目名の「探究基礎」は、大学での本格的な研究に備え、その基礎を身につけるという意味合いで、手法やテーマ設定もアカデミック色が強いのが特徴。1年次前期は「HOP」と位置づけ、自分の興味・関心事を掘り下げるとともに、論文や書籍などを通して根拠に基づいた論述を学び、課題設定に取り組む。「STEP」のステージである1年次後期から

は、学問分野ごとにゼミに分かれて研究方法を身につけ、個人探究への助走を始める。さらに、「JUMP」とする2年次前期は個人探究に取り組み、期末には発表を行い、最後は論文にまとめて提出する。

2022年度からは、「生徒に時間を返す」というカリキュラムコンセプトの下、7時間目の授業を一部削減。空いた時間をどう使うか、

生徒自身がデザインするという取組を始めた。その一環として、新たに2年次後期に「Academic Project」を開設(必修)。生徒の主体性を重視し、生徒が自ら指導教員を選んで相談する、大学のゼミのような形式が特徴だ。テーマや個人・グループなどの縛りは設けず、「自分のやりたいことをできるところまで追究する」ことを優先している。

# A. どう成長したか、プロセスを評価しています。

長崎南山高校（長崎・私立） 進路部キャリア探究課課長・総合探究委員会委員長：徳田憲一郎先生

## 本

校が初年度からこだわってきたのが、「成果ではなくプロセスを評価する」ということ。「探究の学びはプロセスにこそある」という考えから、探究を通してその生徒がどのように試行錯誤したのか、工夫したのか、最初の段階からどう変化・成長したのかを見取することを重視してきました。

プロセス評価の基本は、日々の授業のなかでの「見取り」と「問いかけ・フィードバック」です。教員は机間巡視しながら生徒の様子を観察し、「そのアイデアいいね」「前はこう言っていたけど、その後どうなった？」「どこで行き詰まっているの？」などと声をかけていきます。教員だけの視点に偏らないよう、長崎大学の学生や外部人材の方にもできるだけ授業に入ってもらい、多角的な視点から問いやフィードバックがもらえるようにしています。生徒には毎時間、ポートフォリオに何をやったかどう感じたかといった振り返りを残してもらい、教員はそれに対してもフィードバックをしています。

こうした日々の積み重ねを、2年次には「プロセス論文」としてまとめ、3年次にはその論文を基に「プロセス発表会」に臨みます。いずれも、これまでの自分の取組を、つまずきも失敗も含めて振り返りながら、紆余曲折の変遷を言語化し、どんな力を使った、もしくはどんな力がついたのかをメタ認知することを大事にしています。力については、本校で磨いてほしい8つの力\*を提示しており、生徒はそれに当てはめて自己認識・評価をしていきます。評価で大事なのは、生徒に自分の変化や成長を実感させ、さらなる伸びにつなげること。プロセス論文やプロセス発表会の評価についても、何ができた・できないではなく、次につながるフィードバックとして行っています。

プロセス評価にこだわるようになった原点は、私自身が感じた違和感にあります。探究を立ち上げるにあたり、さまざまな学校に視察に行きました。その先で見たあるポスター発表は、確かに成果としてはもの足りないけれど、生徒たちが一生懸命に取り組んだことがわかるものでした。しかし、周りにいた先生たちは「あれはダメだ」と否定して。生徒が自分のやりたいことをやるのが探究のはずなのに、成果ばかりを求めるのはおかしいのではないか、そもそも良し悪しなんて決められるのかと、納得がいかなかったのです。最初は調べられることもできなかった生徒が、探究を通して自分から動けるようになった。その変化を、成長を、しっかりと認めてあげることが大事。本校ではそうした信念に基づいて評価をしています。

ダウンロード可

総合探究ワークシート  
◆探究課題設定ルーブリック表◆

	S	A	B	C
内容	「自分がやりたいこと」、「社会で求められていること」、「探究する価値があること」、「探究のやりかたを考えたこと」を明確に設定することができている。	「自分がやりたいこと」、「社会で求められていること」、「探究する価値があること」、「探究のやりかたを考えたこと」を明確に設定することができている。	「自分がやりたいこと」、「社会で求められていること」、「探究する価値があること」、「探究のやりかたを考えたこと」を明確に設定することができている。	「自分がやりたいこと」、「社会で求められていること」、「探究する価値があること」、「探究のやりかたを考えたこと」を明確に設定することができている。
内容展開	探究の目的について、誰が何を求められているのか、どうやって実現していくのかを明確にしている。	探究の目的について、誰が何を求められているのか、どうやって実現していくのかを明確にしている。	探究の目的について、誰が何を求められているのか、どうやって実現していくのかを明確にしている。	探究の目的について、誰が何を求められているのか、どうやって実現していくのかを明確にしている。
態度	社会の課題や自分の関心のあるテーマを軸に、探究の価値を見出している。	社会の課題や自分の関心のあるテーマを軸に、探究の価値を見出している。	社会の課題や自分の関心のあるテーマを軸に、探究の価値を見出している。	社会の課題や自分の関心のあるテーマを軸に、探究の価値を見出している。

※こちらは課題設定するとき自身のグループもしくは個人の課題の目標設定に用います。Sランクを目指して！

(注)探究課題を設定しよう！(課題設定の指〜ベン図〜)  
「これまでに作成した問い」と「課題設定ルーブリック表」を参考にして、以下のベン図の4つの角をすべて満たす課題を一つ設定してください。できる限り、ルーブリックの3つの観点である「内容」「内容展開」「態度」がすべて満たされるように目指します。

上部は「探究課題設定ルーブリック表」。生徒と共有し、課題設定の際に、目線合わせに用いている。下部は課題設定のベン図。「自分がやりたいこと」「社会で求められていること」「実現する可能性があること」「新規性」の重なるところに課題を見いだす。

※探究を通して身につけたい8つの力

1. 課題発見力…物事に対して常に疑問を持ち、その問いを主体的に考える力
2. コミュニケーション力…自分自身のことを理解し、相手の立場や気持ちを尊重して話す力
3. 気づく力…物事の変化や相違点、そして自身がハッとする瞬間を大切にできる力
4. 主体性…自ら考え、計画し、行動し、振り返って次に生かす力
5. 発想力…固定観念から脱却し、他者の意見を受け入れ、発想を広げる力
6. 論理的思考力…一つひとつの物事のつながりを理解し、相手に伝える力
7. 計画力…プロジェクトを遂行するための計画や実行に向けて活動する力
8. 創造力…未来を創り上げていく際に、既存の固定概念を取り払い、新たな価値を創造する力

## 探究活動の全体の流れ

2019年度より探究に取り組み、試行錯誤を重ねてきた長崎南山高校。同時期より、生徒の様子から一人ひとりに適した学び方を見いだす「見取り」に力を入れ、プロセス評価におけるフィードバックにも活かしてきた。

1年次の前半には、人生の羅針盤となる

自分の「Will(意志)」を深掘りするワークショップを実施。後半は、見えてきたWillに基づき課題設定を行う。2年次からは探究が本格的にスタート。クラスを横断してテーマごとに6つのゼミに分かれ、その後は3年次の7月までゼミごとに活動する(現・高校1年生のカリキュ

ラムの場合)。各ゼミは基本的に2名の教員が担当し、学校独自の教材を使いながら生徒の探究に伴走する。長崎県内の企業や人材など外部との連携も進んでおり、徳田先生らの呼びかけで、県内の起業家と高校生をつなげる取組も始動している。



## 自分が習ったことない「探究」、 どうサポートしたらいい？

A.

### 生徒が自ら「問い」を見いだせるように後押ししています。

宮崎東高校（宮崎・県立） 定時制課程夜間部：西山正三先生

定

時制夜間部の生徒には、不登校の経験のある者や、人前で話すのが苦手だった者が少なくありません。そうした生徒たちが自ら「問い」を見いだして探究できるよう、本校の定時制1年次の探究活動では、最初に自分と向き合うワークを徹底的に行い、そのうえで課題設定まで進めています。主なワークは次の通りです。

- **自分の強みを知ろう【2コマ】**……ワークシート記載の多数のキーワード（やり抜く力や慎重性等）を参考に、自分の強みとその根拠となる経験を文章化します。
- **マインドマップ【3コマ】**……連想ゲームのようにキーワードをつなげて自分の頭の中を整理します。
- **マンダラート【7コマ】**……興味あるワードをあげ、関連する本を最低1冊は読み、マンダラートと読書シートを作成。「興味の幅」を広げます。
- **哲学対話【4コマ】**……「何を言ってもいい」「否定的な態度を取らない」などのルールに基づき、生徒が問いを生み出し、考え、語り、聞くことをします。
- **5W2Hで問いを立てる【2コマ】**……興味あるワードから、はい・いいえで答えられる「閉じた問い」ではなく、簡単には答えの見つからない「開いた問い」を、5W2Hで考えます。こうしたワークを経て、生徒が自ら問いを見いだすと、2年次以降はそこに向かって本人なりのやり方で動き出すのです。インターネットで情報収集する生徒もいれば、論文を読み込む生徒や、足を使って調べる生徒もいます。プライベート

の時間も使って探究にのめりこみ、「ほかの授業を休んで探究に集中したい」と言い出した生徒もいました（笑）。

本校に赴任した時は、前任の進学校と同じような探究活動はできないだろう、と考えていました。ですが、今は本質は変わらないと感じています。例えば本校の生徒は、「興味・関心が既存の教科にはあてはまらなかったが、好きなものや才能は眠っている」と言えます。ただ、その自分の中にある思いを表に出すのを「怖がっている」ことが多いのです。同じような傾向は、前任校の生徒にも見られました。だからこそ、探究活動に関わる先生方には、まず「対話をしてください」とお願いしています。対話によって生徒の思いを引き出してほしい、と。

探究のなかで生徒が外部のいろいろな人にふれることも大事にしています。哲学対話をしてくださる大学教授や、探究をサポートくださる経営者、キャリア教育コーディネーター、宮崎大学の学生の皆さん。その出会いが生徒に新たな気づきをもたらし、自分の才能を見つけたり、伸ばしたりすることもあると思うからです。

定時制夜間部は、以前は半数近くが中退することもありましたが、ここ数年はほとんど退学者が出ていません。探究で自発的な読み書きをするからか、総じて国語の成績も伸長。ある生徒は、興味の幅をアニメから経済まで広げて簿記の資格を取って進学し、別の生徒は、探究の成果で国際シンポジウムで最優秀賞を取るなど、個々の生徒が秘めていた力を発揮することも増えてきています。

### 探究活動の全体の流れ

1年次は「自己探究」で、自分と向き合うワークから課題設定まで進める。2年次は「社会探究」で、課題に基づく探究にチャレンジ。3・4年次の「進路探究」では、今までのワークやノウハウを活かし、進路実現に挑む。

例年11月には全学年・全生徒による成

果発表会があり、1月に各年次代表による発表会も。また、定時制の探究活動の全国大会という位置づけで、「結果ではなく、どのくらい自分の好きなものを探究できたか」を発表し合う「過程重視探究発表会」も、同校がホストとなり3月に開催している。

同校の生徒がこれまでに取り組んだ探究テーマについて、一例をあげれば、「なぜ人に好かれようとするのか」「コスバ最強の地図作製法」「民衆が日清戦争・日露戦争に賛同した理由」「人を感動させるコツ」「ゴブリが嫌われる原因は何だろう」などがある。

# A. 教員自身が 探究をやってみました。

富士東高校（静岡・県立）  
探究委員長：鈴木翔太先生、伊藤智章先生

## 教

員が探究し、1年生の前で発表することを、昨年度の6月に行いました。その実践も参考に、生徒がいろいろな視点から探究活動に臨めるようにするためです。探究をしたのは1学年の教員全員。私は大学時代に研究した「古代ギリシャの国葬」のことをまとめ直しました。探究の仕方は各自に委ねられ、最初は戸惑う先生もいましたが、最終的には皆さん、その先生の色を出した発表をされていたと思います。生徒からは「先生たちが楽しそうで聞いていても楽しかった」「知らなかった分野に興味をもてた」「好きなことを突き詰めるのが大切だと感じた」などの感想がありました（鈴木翔太先生）。

教員の発表は、体育館で一斉に、生徒が行き先を選べる形でいきました。生徒も1年次の終わりには、同じように体育館で発表するからです。内容次第で人の集まりに差が出るわけで（笑）、教室に行けば生徒がいる普通の授業とは異なる体験でした。ネタの面白さを吟味し、伝え方を工夫し、発表してみても「意外とここは響かないんだ」「この生徒はこういうのが好きなんだ」と気づいたり。生徒も

そのように探究に挑むだけに気持ちを理解しやすくなった良さもありました。私の発表テーマは、今までの授業実践を踏まえた「探究における地図の使い方」。普通の教科の授業でも生徒にその視点を育みたいと改めて思いました（伊藤智章先生）。

学校だよりでも先生の探究をレポート。

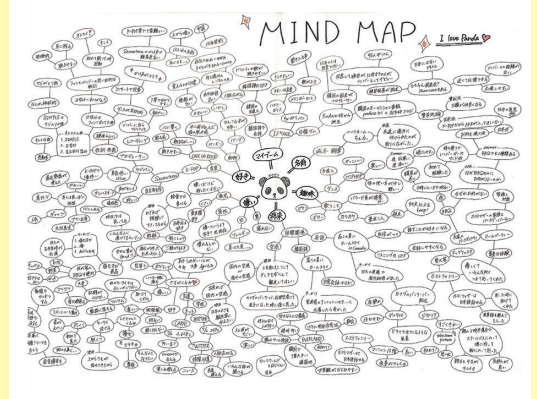
ダウンロード可



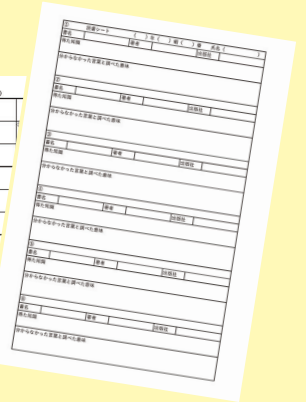
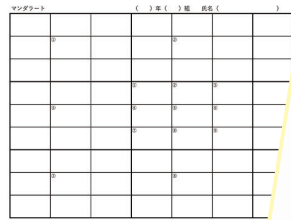
## 探究活動の全体の流れ

1～2年次に個人およびグループで探究を行い、3年次にその経験を志望理由書や自己PR等に活かし、進路実現を目指す。探究の「問い」を生徒が自ら設定できるよう、「さまざまな視点にふれる機会」を重視。昨年度は教員による探究の発表を行い、今年度は3学年合同で先輩が後輩に探究を語る座談会を実施。静岡県立大学との連携で、校内での大学教授や大学生による講義も行っている。

## ● マインドマップ



## ● マンダラートと読書シート



ダウンロード可

## ● 哲学対話のルール

ダウンロード可

### 哲学対話の基本的なルール

- ①何を言ってもいい
- ②人の言うことに対して否定的な態度をとらない
- ③発言せず、ただ聞いているだけでもいい
- ④お互いに問いかけるようにする
- ⑤知識ではなく、自分の経験にそくして話す
- ⑥話がまとまらなくてもいい
- ⑦意見が変わってもいい
- ⑧分からなくなってもいい

## ● 5W2Hで問いを立てる

ダウンロード可

5W2Hで問いを聞いた問いに書き換えて、更に発展させてみよう  
哲学対話を受講する前に、今まで自分たちが行ったマインドマップやマンガカートなどを参考に、キーワードを取り出し、問いを発展させていってみよう。全て必ず？で終わるようにしよう！

テーマ名 (問いの名前)	イチゴは赤くなるのか？	赤じた無い (△) か無い (○) か	氏名
1 疑問詞を変えてみる (問いの問いに書き換える)	何が (何) 何 (いつ) 何 (どこ) 何 (誰) 何 (なぜ) 何 (どう) 何 (どうやって)	What When Where Who Why How many How	
2 発展させた問い (すでに見つからない問いを再考してみる)	イチゴはいつ赤くなるのか？ イチゴはどの場所でもよく赤くなるのか？	イチゴはどの時期に赤くなるのか？ イチゴはどのくらい赤くなるのか？	

参考：課題研究メソッド2ndEdition Teacher'sManual P65





## どうしたら在り方・生き方や進路につながる?

### A. 探究を伴走した教員が、 進路の相談にも乗っています。

青翔開智中学校・高校（鳥取・私立）  
探究部主任（SSH担当）：田村幹樹先生  
進路支援部主任：森川真吾先生

#### 本

校では、高校2年次に個人で課題研究に取り組み、3年次にはその成果を論文にまとめたうえで、進路やキャリアを考えていきます。個人探究（課題研究）と進路については、生徒1人に教員1人が付いて伴走します。2年間を通して同じ教員が担当し、生徒がたどった探究プロセスをそばで見えてきた教員が、進路選択に当たっても、対話を通して生徒が自らの道を見いだすサポートをしています。

探究で肝になるのが、テーマ設定です。私たちは、「好きなこと（興味・関心）」「得意なこと（能力）」「大切なこと（価値観）」「社会から求められること（社会）」が重なる部分にテーマがあると考えています。生徒たちはこの4つの視点で「こと」を書き出しつつ、大学で何を学びたいか、将来はどんな仕事をしたいか、どうありたい・生きていきたいか…といったことも考えながら、テーマを絞っていきます。本校の卒業生は、結果として課題研究のテーマと関連のある分野に進むケースが多いですが、進学先や大学受験から逆算してテーマを選ぶ指導はしていません。探究に取り組んだ結果、それが進路や受験につながればそれはそれでいいし、直接的につながらなくていい。そもそも探究は分野横断的なものですから何らかの関連性があることが多いですし、本当の意味でその「成果」を感じるのには、今ではなく10年後かもしれないのですから。

#### 探究活動の全体の流れ

開校当初から探究を軸に据えた教育を実践。中高6年間を通して探究に取り組み、「課題を創造的に解決できる人」になることを目指している。総合型選抜・学校推薦型選抜による大学進学者も多く、学校のホームページ等では、卒業生の進路（進学先）とその生徒が高校で取り組んだ課題研究のテーマの一覧を公開している。

### A. 探究と進路を地続きと捉え、 卒業生の手も借りています。

ふたば未来学園高校（福島・県立）  
企画研究開発部主任：林 裕文先生

#### 探

究と進路を地続きのものとして捉え、生徒に伴走しています。就職希望だった生徒が探究をきっかけに大学進学に切り替えたり、探究で取り組んだ原子力についてもっと深めたいと大学で研究する道を選んだり、探究と進路が一体化した生徒は強い軸をもって、モチベーションも高いんですね。そんな姿を見て、探究と進路とつなぐことが大切だと、私たちも考えるようになったのです。興味深いのが、探究のテーマが大学の学問分野に直接的につながるというよりは、探究を通じた出会いや生まれたつながりが進路選択に影響を与えるケースが多いということ。漠然と「小学生と何かをしたい」と探究を始めた生徒が、教員との対話から小学校で絵を描くというアクションにつながり、先生になりたいと大学に進学し、教育実習生として本校に戻ってきた…というケースもありました。目指す姿から逆算して決めるだけでなく、偶然出会ったものから自分の手で選び取っていくのも進路の決め方なのではないか。この学校に来て、私自身のキャリア指導観も大きく変わりました。

また、コロナ禍中には「卒業したって探究は続くんです」というオンラインイベントを卒業生が主催し、高校時代に夢中になった探究や大学での学びについて発表しました。反響が大きかったので、今年5月には私たちから卒業生に呼びかけてポスターセッションを開催しました。ロールモデルとなる卒業生の存在は大きいと感じています。

#### 探究活動の全体の流れ

「未来創造探究」では地域や身の回りの課題に取り組むことを通じて未来の社会や自分をつくっていく。1年次後半にはブレ探究に取り組み、課題テーマを模索。2年次からは6つのゼミに分かれ、3年次前半まで個人やグループごとに探究に取り組み、最後は発表して論文にまとめる。

テーマ 探究の意義



## 探究の「具体的な価値」がまだ見えなくて…

### A. 生徒の学びの主体性や挑戦する意欲が高まりました。

札幌藻岩高校（北海道・市立） 探究計画部長：千葉建二先生、進路部長：長井 翔先生

地

域と関わる探究に、本校が乗り出したのは8年前。当初はまさに「なぜやらなきゃいけないの？」という空気でした。生徒から「その時間に受験勉強をさせて」という署名活動が起きたほどです。僕らが探究の意義を伝えきれていなかったからだと思います。ですが、活動を重ねていくと「この経験が自分の糧になる」と実感する生徒が増えていったんですよ。今では総合型選抜や学校推薦型選抜で、多くの生徒が探究の話をする。期待を上回る自走をする生徒も増え、学校全体で「生徒のやりたいことをベースに探究を進める」体制ができてくと、明確なビジョンをもって取り組む生徒も激増。探究は「特別な生徒」だけ熱心になると思われがちですが、本校ではほとんどの生徒が探究に前向きで、それを「普通のこと」と捉えています。

一番の変化として感じるのは「卒業後の活躍を聞くことが増えた」ことです。蓋が外れたのか、進学先など今いる場所

でもチャレンジをし続けているのです。

探究学習を推進したのは、生徒が外のリアルな場にふれて、より生き生きと学んでほしかったからでした。今はそれに加えて、そんな生徒や地域の人と接するなかで「自分自身が変化していく」のも本当に楽しい、と感じています（千葉建二先生）。

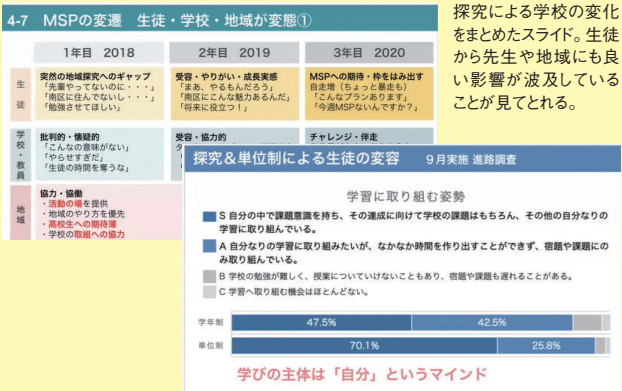
昨年度まで3年間持ち上がりで関わった生徒たちに、探究学習などでどんな変容があったかを、生徒のアンケート調査のデータを基に分析してみました。

そのなかで見えてきたのは、学習に取り組む姿勢が明らかに変化していたことでした。「自分なりの課題意識をもって学習に取り組んでいる」生徒は、以前の5割以下から7割に増加。「取り組みたい」とする生徒も加えると9割超で、「学びの主体は『自分』」という意識が強まったようです。「部活動や課外活動で受け身にならず自分から動いた」「学校内外でチャレンジすることができた」生徒も8割超まで伸ばしました。

こうした変容のあった生徒たちは、受験でも過去最高レベルの結果を出したんです。それも、推薦で受からなかった生徒が諦めずに一般選抜にも挑み、第一志望に合格するなど、総合型・学校推薦型選抜にとどまらず、一般選抜で力を発揮した生徒も多かったのです。加えて、推薦などで年内に進路が決まった生徒は、以前は気が抜けやすい印象がありましたが、今では「合格が決まったからこそ、残された高校生活で自分のやりたいことに打ち込む」という傾向が見られます。

自分としては、探究で培ったそうした意識や姿勢が世の中でどう生きるか研究し、生徒たちの活躍を一層後押ししたいと思っています（長井 翔先生）。

ダウンロード可



### 探究活動の全体の流れ

1年次に「本物」にふれる機会を数多く用意（大学や地域でのフィールドワーク等）、生徒が社会の中で自分軸を発見。2年次には学校のある南区で地域貢献や課題解決

に挑み、後半ではその経験も踏まえて自己の未来を描き、行動する。3年次は各自が学校設定科目などで自分のやりたいことを深める。2021年度より単位制に移行し、生徒たち

は探究を進めながら自身で多くの授業を選択できるようになった。このことが、「学びの主体は『自分』」という意識を高める相乗効果を生んだのではないかと長井先生は分析している。

## A. 探究が、教科指導の向上や改善にもつながりました。

高崎高校(群馬・県立) SSH主任：岡田直之先生、SSH副主任：鈴木幸英先生

**本** 校では、実社会・実生活から生じる「問い」を複数教科の知識・技能を活用して深める「クロスカリキュラム授業」を推進しています。全教員が、年1回は、他教科の先生と組んで、互いの教科の視点を活かしながら「問い」を考え、教科横断型授業を開発・実践するのです。生徒はその授業のなかで「知の活用」を体感し、その経験も活かして、自分のテーマを探究する課題研究に挑んでいきます。

こうした取組は「教員の指導力向上や授業改善に役立つか」について、例年アンケートを取っています。結果、「とてもそう思う」と答える先生は年々増加し、8年前は29%だったのが、昨年は65%に。「そう思う」と答えた先生も合わせると9割以上が肯定しています。主な理由は「教材開発で発見がある」「他の先生の視点や着想、手法を得られる」「教科間の連携が促進される」というもの。本校のクロスカリキュラムは、深い学びのプロセスである「習得」「活用」「探究」のうち、「活用」を意識しています。クロスカリキュラムによ

って普段の授業と探究をつなぎ、深い学びの実現を目指します(鈴木幸英先生)。

生徒は自身の課題研究を通して、科学的アプローチ、データ処理、ロジックのまとめ方、ルーブリックによる評価なども実践的に学びます。最近では、そうした探究で身につけたことを、普段の教科の授業でも活かすよう、先生方が生徒に促しています。「仮説・検証しよう」「ロジックを整えて」「ルーブリックを使うよ」などと。「探究でもやったよね」と。探究と普段の授業とのつながりを意識した声かけをすることで、どのような場面でも活用できる汎用的な見方・考え方が身につけられると思います。

課題研究では「武器は何を使ってもいい、使える知識や技能を自分で手に入れて。高校生の枠にとられないで」と呼びかけています。すると、自分で学んでどこまでも伸びていく生徒が出てくるんです。そうした生徒の探究と一緒にわくわくできるというのも、一律の授業だけであつたら味わえなかつた体験だと思っています(岡田直之先生)。

### 探究活動の全体の流れ

「知の活用」として教科横断型のクロスカリキュラム授業を展開。「知の深化」として、3年間を通した課題研究に全校生徒が取り組む。また、「知の交流」として、科学的対話スキ

ルの習得を目指し、データサイエンスやプレゼンテーション等について体験的に学習する。

同校ホームページのSSH事業紹介ページでは、これまでに開発・実践されてきたクロスカ

リキュラム授業の指導案や課題研究の教材等を確認できる。また、2024年12月には、これまでの研究成果を踏まえた公開授業も予定されている。

### 編集後記

## 探究の山を登る

今号は、2022年から本格実施となった「総合的な探究の時間」について、改めて特集いたしました。各学校での取り組み内容を元に、生徒の変化や成長、進路選択への影響のみならず、その裏側にある先生方の葛藤、苦労、工夫なども、実施から少し時間が経った今だからこそ具体的なお話を伺うことができました。探究学習に対しては、捉えどころのない難しさを感じている方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、取材を通して見えてきたのは、探究学習は必ずしも「型」や「ステップ」に当てはめていく必要はなく、それぞれの学校や地域、生徒に合った活動を模索し続けていく、過程そのものを楽しむ姿。あり方に正解がないからこそ、そのような心の持ちようが、大切なものかもしれないと僭越ながら感じました。

私たち編集部も、探究学習についてこれからも取材を重ねることで、その深化を共に学ばせていただき、今後も編集と情報発信を通して、探究活動の一助となるよう努めて参ります。